

第35回東北地区私立幼稚園教員研修大会 〈 秋 田 大 会 〉

令和3年10月15日（金）16日（土）

第4分科会

分科会テーマ 自然環境を生かした協同的な遊びと学びの実践

「五感を通して味わい、感じ、気付く芽を育む」

～ 園内の自然環境を生かして ～

認定こども園 追分幼稚園 附属追分ベビー園

幼稚園型 認定こども園 追分幼稚園 附属 追分ベビー園

教育方針

本園では教育基本法に従い、幼児にふさわしい適当な環境を与えて、心身の調和的な発達を促し、次のような子どもに育てるよう努めている。

めざす子ども像

- 1 健康で、明るい子ども
- 2 自分で考え、自ら行動し、やりぬく子ども
- 3 感じたこと、考えたことをすなおに表現する子ども
- 4 友達と遊び、思いやりのある子ども

健 康
主体性
表現力
思いやり

本園の特色

- ☆ 幼い子どもにとって自然環境の果たす役割は大きい。本園の樹木に囲まれた園舎や広い芝生の園庭は知らず知らずのうちに子どもたちを戸外への活動に導き体力をつけたり、豊かな情操を養う土台となっている。それを的確に教育・保育に位置付けて指導をするよう努めている。
- ☆ 子どもの心を躍動させ、心身の働きを活発にする造形活動を教育・保育に取り入れ、無理なく感動を表現する子どもの育成に努めている。
- ☆ 自分の思ったことを素直にことばで表現するなど、楽しいお話を聞いて想像の世界に遊ぶ幼児期ならではの経験を大切にし、ことば指導に重点を置いた教育・保育活動を行っている。

研究テーマのとらえ方

・今日では、自然が減少しつつあり、交通事故等の安全面の不安や保護者の就労など、様々な事情により子どもたちが十分に体を動かして遊べないだけでなく、自然や四季を五感で感じ味わう経験も少ない現状にある。当園の恵まれた広い豊かな環境の下で、多くの友達と思い切り体を動かして遊び、各季節ならではの自然に触れ、喜びや驚きを友達や保育者と共感したり、不思議に思ったことを子どもなりに考えたり、五感を通して味わい感じることは、生きる力の育ちにもつながっていくのではないのかと考える。保育者間で五感のとらえと発達の段階のとらえを共通理解し保育に当たること、保育者は同じ目線で子どもたちの主体的な活動を支えることができ、子どもたちの生きる力の育ちにつながる成長過程へと生かされていくのではないか。

研究の視点

- ・ 自然に触れる体験を通し、感じたことや考えたことをどのように表現し、友達と共有しているか、そして、室内活動では得られない、豊かな自然環境で過ごしたからこそ、心を動かす出会いは、どのようなことなのかを考察していく。
- ・ 自然物や生き物に触れる経験体験が豊かな感性を育み命の大切さや、思いやりの心、もっと知りたいという意欲をかきたてるために、保育者はどうあるべきかを考える。

研究の方法

- ・ 保育者が同じ目線で子どもたちの主体的な活動を支えるために、どんな子どもに育てたいか、また、五感のとらえと発達の段階のとらえについて、保育者間で共通理解を図る。
- ・ 園の自然に触れることで、子どもたちがどのような場面で心を動かしているのか、エピソード記録を重ねていく。
- ・ 記録の子どもたちの姿から、今何が育とうとしているのか見取り、育てたい姿に近づけるために保育者はどんな援助をしたらいいのか探っていく。

五感のとらえと発達の段階のとらえ

3 歳児：五感を通して触れる、知る、やってみる → 楽しむ、味わう

	自然環境を生かす 直接的な活動	直接的な活動を支える ○環境構成★保育者の援助	保育者の思い・願い
視覚	<ul style="list-style-type: none"> 虫を見る→探す 花を見る 	<ul style="list-style-type: none"> ○虫についての絵本や図鑑を用意する。 ○植物を植える。 ★子どもたちが興味をもてるような声かけをする。 ★子どもの表情を見ながら、感じていることを代弁する。 ★一緒に遊び楽しむ。 ○虫かごや虫とりあみを準備する。 ○畑や花壇などを整える。 ★畑に一緒に行ったり、収穫したりする。 ★花の匂いは気付きにくいかもしれないので、保育者がやってみせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・3歳児は“知ること”から始まるので、身近な自然に触れる中で、タイミングを見逃さず“知る”きっかけになるような、驚いたり発見したりする楽しさを感じられるような、働きかけをたくさんしていきたい。また、子どもたちが興味関心、やってみようとする気持ちをもてるような言葉かけをしていきたい。 ・やってみる…やりたいことをやることのできる環境であるか。保育者間で共通理解を図りながら、見直していきたい。 ・子どもたちの小さなつぶやきや気付きにしっかりと目と耳と心を傾け、ありのままを受け止めたい。受け止めてもらえたことを喜び、自己表現・自己発揮できる子どもになってほしい。
聴覚	<ul style="list-style-type: none"> 虫の声を聞く 雨音を聞く 風の音を聞く 		
触覚	<ul style="list-style-type: none"> 砂遊び 水遊び 泥遊び 虫を捕まえる 		
味覚	<ul style="list-style-type: none"> 畑でとれた野菜を食べる サルビアの花の蜜を吸う 		
臭覚	<ul style="list-style-type: none"> 花や草の匂いをかぐ 		

五感のとらえと発達の段階のとらえ

4 歳児：五感を通して友達とかかわりながら、一緒に遊ぶ楽しさを味わう

	自然環境を生かす 直接的な活動	直接的な活動を支える ○環境構成★保育者の援助	保育者の思い・願い
視覚	<ul style="list-style-type: none"> ・ 葉っぱを見る (色の変化に気付く) ・ 虫を探す ・ 風車を作る ・ 花を見る 	<ul style="list-style-type: none"> ○花壇を整える。 ★子どもたちと水かけをして野菜や花の生長を一緒に喜ぶ。 ★風を視覚で感じられるような遊び(風車や凧など)を提案していく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 4 歳児になると、これまでの経験を生かし様々なことにかかわろうとする姿がある。特に興味のあることにはじっくり取り組み、おもしろさを感じたり、新しい発見があったり、気付きが生まれる。その姿を大切にし、子どもたち自身が自分の学びとして力にしていけるように支えていきたい。 ・ 同じ遊びに興味をもった仲間が集まり、思いを出しながら楽しむ姿を認めて、子どもの目線になって一緒に考えたり共感したりしていきたい。 ・ 好きな友達から刺激をもらい、興味をもつきっかけとなることも多いので、一人の子どもが気付いたこと、発見したことなどみんなに伝える機会を作り、友達同士でつながれるようにしていきたい。そして友達と一緒に楽しい！と思うような経験をたくさんしながら、友達の大切さに気付き、思いやりの気持ちが育っていったほしい。
聴覚	<ul style="list-style-type: none"> ・ 風、雨、葉の音を聞く ・ 虫の声を聞いて、何の虫がいるか気付く 	<ul style="list-style-type: none"> ★何か聞こえない？と投げかけて音を表現しようとする姿を見守る。 	
触覚	<ul style="list-style-type: none"> ・ 花を摘んで遊ぶ ・ 砂、水、泥遊び ・ 虫を捕まえて触る 	<ul style="list-style-type: none"> ★子どもたちの気付きに共感していく。 ★それぞれの気付きを周囲に伝えていく。 	
味覚	<ul style="list-style-type: none"> ・ 畑でとれた野菜を食べる ・ サルビアの花の蜜を吸う 	<ul style="list-style-type: none"> ○虫かごや水鉄砲を準備する。 ○取った花や虫について調べることができるように図鑑や絵本を置いておく。 	
臭覚	<ul style="list-style-type: none"> ・ 土や草、花の匂いをかぐ ・ 銀杏拾い 	<ul style="list-style-type: none"> ★一緒に畑や花壇の観察や草取をしながら生長を見る。 ○臭いけど食べるとおいしい“ぎんなん”を食べる機会を作る。 	

五感のとらえと発達の段階のとらえ

5 歳児：五感を通して友達と一緒に考える、工夫する、広げる

	自然環境を生かす 直接的な活動	直接的な活動を支える ○環境構成★保育者の援助	保育者の思い・願い
視 覚	<ul style="list-style-type: none"> ・虫探し、虫の観察 ・畑の観察 ・色水遊び ・種や苗を植えて生長を見守る 	<ul style="list-style-type: none"> ○クラスで生き物を飼う。 ○不思議に思ったこと、わからないことを調べられるように、絵本や図鑑を準備する。 ★一人一人の気づきを大切に受け止め、共感したり、一緒に考えたりしていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友達とのかかわりが深まってくる中で、自分の思いだけではなく、友達の考えを聞いて遊びに取り入れられるようになってくる。友達のアイディアが加わることで新たな発見があったり「こうしたらどうか」と新しい考えが浮かんだり、多くの学びにつながる。年長だからこそ保育者は友達同士の学び合いの場を大切に、状況に合わせて見守ったりヒントを与えたり、子どもたちの気づきを大切にしていきたい。 ・子どもたちから出た「なんでだろう」を自分たちの力で考え工夫し解決できた時、達成感や喜びが味わえる。その感動を友達同士で共感し合う経験をたくさんできるようになってほしい。 ・不思議に思ったことに対して調べたり試したりできる環境が保障される中で、『問い』を発する子どもに、その『問い』に主体的にかかわろうとする子どもになってほしい。
聴 覚	<ul style="list-style-type: none"> ・枯れ葉を踏んで音を聞く ・風、雨、葉の音を聞く ・虫の声を聞いて何の虫かわかり、友達と探す 	<ul style="list-style-type: none"> ★気付いたこと、感じたことなどを友達に伝え合う機会をあえて作り、発見や驚きを共有していく。 	
触 覚	<ul style="list-style-type: none"> ・砂、水、泥遊び ・虫を捕まえて触る、世話をする 	<ul style="list-style-type: none"> ○友達といろいろ試しながら思いきり楽しめるよう、時間と場所を保障する。 ★一緒に観察や草取りをしながら畑や花壇を整え、生長を期待できる声かけをしていく。 	
味 覚	<ul style="list-style-type: none"> ・畑でとれた野菜を食べる ・サルビアの花の蜜を吸う ・おにぎりパーティ ・やきいも大会 	<ul style="list-style-type: none"> ★地域の自然に興味関心をもてるように、お米について農家の人から話を聞く機会を作る。 	
臭 覚	<ul style="list-style-type: none"> ・銀杏拾い ・畑で野菜の収穫 ・花びらや草をつぶして色水遊び 	<ul style="list-style-type: none"> ○臭いけど食べるとおいしい“ぎんなん”をみんなで味わう。 ★収穫した時に出る野菜の匂いをみんなで体験して共有し合う。 	

3 歳児エピソード 色水づくり

年少では夏休みが明けてから、色水づくりを楽しむ姿がある。
花を摘んできては「先生、袋ちょうだい」「お水入れたい」と伝えてくる。

ある日、両手いっぱい花を摘んできたＹ子は袋に水と花を入れた後、もみながら
「これなんかモチモチだよ！」
と周りで色水を作っている子どもに伝えていた。
すると周りの子どもたちがＹ子の持っている袋を見て触り、
「ムニムニじゃない？」
「むにゅってしてるー」
とそれぞれが思いを伝え合う。
そして顔を見合わせながら
「変なの！」
「おもしろい！」
とニコニコ笑い合う子どもたちだった。

水と花の入った袋の感触は、あまり味わったことのないものだったようだ。その感触のおもしろさが子どもたちの中で広がり、共有されていく。一人の子どもの何気ない一言であっても、子どもたちの中で広がりを見せることがある。このような“ちょっとおもしろい”“なんだかおかしい”が日々の中で積み重なっていくことで感性の豊かさにつながってないのではないかと感じた。豊かな感性を育むためには保育者の環境づくりや声かけ、子どもたちの“やってみたい”に応えることができるような、タイミングを見逃さない働きかけが大切になってくるのではないだろうか。

また、子どもたちの小さな発見や気づきでも、保育者も共に喜び楽しみながらやってみようとする意欲につながるようにしていきたい。

4 歳児エピソード① 砂山「砂のかまくら」

砂場に子どもたちが集まり、スコップを持ち大きな砂山を作っている。

子どもたち同士で話し合いながら、「砂を持ってくる」「私は固める」と役割を決めながら大きくしようと意欲的であった。貝殻で飾り付けしようという子どもの声に、周りの子どもたちが興味をもち、砂山に貝殻を飾り始めた。白い貝殻やピンク、形も様々であった。

保育者：「きれいだね。」「いろいろな色で素敵だね。」

A 子：「かまくらみたいでしょう。」

B 子：「雪降ったら大きなかまくら作ろうね。」

大きな山を作り、貝殻で飾り付けをしている間にいろいろな会話をしながら、友達と協力して遊びが展開している。次の日に残るよう、そのままの状態保育室に戻った。保育室から砂山が見られ、気になってチラチラ窓の方を見ている子どもの姿があった。

保育者：「明日どうなってるか楽しみだね。」

H 子：「小さくなってるんじゃない？」

B 子：「雨降るかもしれないもんね。」

M 子：「お迎えの人壊さないかな？」

砂山を心配している子どもたちの会話が聞かれた。

次の日、砂山を気にしながら登園した子どもたちは、小さくなっているが、ちゃんと残っていることで安心している様子であった。また、夜、雨が降ったことに気づいた子どもは「雨が降ったから小さくなったのかな」と昨日より小さくなった砂山について友達と話していた。

砂場に行くと、少し崩れているが「また作り直そう」と言って自分たちも崩し始める。

崩すのを楽しんでいる様子も見られた。

すると今度は二組に分かれて、競争のようにして二つの山作りが始まった。

貝殻が埋まっていると、「宝探しみたいだね」とたくさんの貝殻の砂を払いながら掘り起こしていた。また、手を砂の中に入れ「冷たい」「気持ちいい」と感じたことをつぶやいていた。

大きな山を作ろうと、友達同士で役割分担しながら協力して遊ぶ姿、その遊びを周りの子どもたちも「おもしろそう」と一緒になって取り組み新しい遊びへと変化していく姿、山を作るというひとつのことでもどんどん発想が変わり、一緒にかかわる中で友達を通して興味関心が広がっていく。貝殻で飾り付けという発想も、子どもたちの会話から始まる。次の日に残しておくことで、どうなるのか予想したり、期待する気持ちを言葉で伝え合いながら楽しむ姿や友達と一緒に協力して作った達成感に保育者も共感した。安心して遊べる環境の元に、友達に自分の思いを伝えたり、その思いを受け入れてもらえた喜びを感じながら、友達っていいね！一緒に遊ぶともっと楽しくなるね！を体感して心豊かになっていってほしい。

4 歳児エピソード② 色水遊び

以前から椅子を出してごっこ遊びをしていた場所の近くに、紫色の小さな花・萩が咲いていた。

「きれいだね」「かわいいね」と子どもたちが話しているのを聞き、水の入ったカップに入れ部屋に飾って置いた。子どもからもらったタンポポも一緒に入れる。

子どもたちから「ジュースみたい！私も作ってみたい！」という声が出た。

次の日から、外に出ると自分の虫かごを持って、萩を摘み始めた。ままごと用のコップに水を入れ、萩やタンポポを浮かべてジュース屋さんが始まった。

年少組の子どもたちがナイロン袋に水と萩を入れ、揉んで感触を楽しんでいると、薄紫色の水になっていることに気付き、子どもたちも保育者も「きれい」「すご〜い」という感想が言葉に出た。

子どもたちに色を出したいという気持ちが出てきたので、花びらを潰す棒と水、ペットボトルを準備した。萩を摘んで水を入れ棒でトントンと潰し始めた。どんな色になるか楽しみにしながら透明なペットボトルに入れてみると、きれいな紫色の水になっていた。周りの子どもたちも「作ってみたい！」と集まり色水遊びが始まった。最初は萩だけであったのが、花壇のベコニアやマリーゴールド、サルビアの花びらを集め色水を作り始めた。

A 子：「オレンジ色になったよ」

B 子：「私は薄ピンク。見て見て」

オレンジ色や薄いピンク色、青色など様々な色に子どもたちもワクワクしながら楽しんでいた。年少組、年長組の子どもたちも「やってみたい」と興味をもち、身近にある花を集めトントンと色水遊びを始めた。

いろんな色水を部屋に飾っておいたところ、「あれ、色が変わってる！」と気付く。

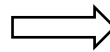
紫色の水が少し濁った水になっていた。気付いた子どもから、友達へ教えている。

M 子：「きれいな紫色だったのに」

K 子：「何でだろう。明日も作ってみよう」

色水を気にかけて観察する姿が見られた。

また、色水と花びらが入ったペットボトルを逆さまにすると花びらが上に上がってくることにも「おもしろい」と興味をもち、ひっくり返すことを楽しむ姿が見られた。



身近にある草花に興味・関心をもち、色水遊びへと展開した。

萩やタンポポ、サルビア、ベコニア、マリーゴールドなど花が咲いている場所、この時期に咲いている花など、子どもたちが一緒に探したり見つけたりしながら、保育者も子どもの興味関心に共感していく。子どもから子どもへと「おもしろそう！」が伝わり、異年齢でいろいろな感じ方があったように感じた。

色水が時間が経つと色が変わることに子どもたち自身が気付き観察することで「どうして？」という疑問を抱き、不思議な現象を目にすることができた。また、身近な自然に触れ、心を動かされ経験を友達と一緒に体験でき、保育者もその場を共有することで共感することもできた。

今後も子どものつぶやき、気づいたことや感じたことを子どもの目線になり、一緒に考えたり共感したりしていきたい。

5 歳児エピソード① 不思議な石

5 月、R男が外遊びをしているときにある石を拾ってきたことから始まる。

石だけどなんか軽くておかしい・・・家に持って帰っていい？

母から「軽石じゃない？」と教えてもらい、次の日園にまた持ってきて友達や保育者に伝える。

軽石って…？初めての言葉に興味を示す子どももいたので、保育者が水に入れてみることを提案。

水に浮かぶ石を見て、浮いてる → 軽い と理解した子どもは2人ほど。同じ水の中に別の石を入れて沈んでいく様を見て、軽石は他の石と違うことに気づいていく。

みんなで相談して、水に浮かんでいる軽石が入ったボウルをそのまま保育室に置いておくことにした。

その時から毎日誰か一人は必ずその石を観察する姿があった。

「石（軽石）から泡が出てる！」

「水がなくなってきた。」

「水が汚くなってる。」

「石（軽石）に穴が開いてる。」

石に興味を示す子どもが増え、連日園庭の石を拾ってきては浮かぶか実験したいと訴えた。

でも水に浮かぶ石はひとつも見つからなかった。

夏休みが明けてからも子どもたちの観察は続く。

9月中旬、「石（軽石）が下に沈んでる！」と子どもたちが発見。

なんでだろう？

「穴から水がはいったのかな…？」

「ずっと水に入れていたからじゃない？」

それぞれが思いを伝える。

そのあと子どもたちでその石を水から出して触っていると石は粉々になってしまった。

一人の“不思議”から始まった出来事。

普段何気に目にしたり触ったり遊びに使ったりしているものが、長い時間子どもたちの目に触れ注目を浴び、盛り上がる対象となった。この石を中心に、自分の思い（驚きや喜び）を友達に発信したり、次は〇〇してみよう！とわくわくしながら試したり、根気強く観察して昨日との違いに気が付いたり、生き生きと表情豊かに楽しんでいる姿から、心が動いているのを感じた。保育者は正直ここまで盛り上がるとは想像していなかったが、今回一人の子どもの小さな発見がたくさんの子どもたちの心を動かしたことに私自身も心動かされ、改めて、子どものつぶやきや発見を見逃さずに拾い上げ、周囲に伝えたり一緒に考えたりしていくことの大切さを感じた。

今回の体験後、子どもたちの日常に“実験”と呼ばれる遊びが加わった。何で？どうして？が増えて図鑑を手にすることが多くなったり、友達や保育者と一緒に考え試したり、家庭で調べてきたり、主体的に取り組む姿が見られるようになった。

これからも子どもたちが「どうして？」と感じる姿を大切に受け止め、友達や身近な環境を通して主体的にその『問い』を解決しようとする子どもになっていけるよう支えていきたい。

5歳児エピソード② これって何だろう…？

新学期が始まり、新しい環境にもすっかり慣れてきた子どもたち。暖かい日には積極的に戸外に出て遊ぶ中で、春の草花を見付けたり、虫を探したりする姿が見られた。

「この花チューリップ！」

「これはなんだ？」

「この虫はダンゴムシだけどこっちは？」

と見つけて喜ぶとともに、見つけた草花や虫の名前が分からず

「なんだろうね・・・」

と言葉に出すだけで解決せずに終わっていた。

きっかけ①

保育者・・・保育者が戸外で見つけた植物や虫をビンゴのように紙に描き、見つけた物をよく観察し色を塗れるようにした。色を塗ったら、シールを貼った。保育室内にある図鑑を持って戸外にいつでもよいこととし、遊具で遊ぶ際は危険なため片付けることという約束事を一緒に決めた。

子どもたち・・・「しいたけはしおれて悲しそうだったから赤色なの」

「ここは薄く塗って・・・」

など喜んで見付けた自然物に色を塗ったり、友達同士見せ合って色の違いや見つけた数を数えたりしていた。分からない自然物を見つけたら

「これはなんだ？図鑑で調べよう！！」

と早速図鑑で調べたり、小さいものは虫眼鏡を使ってじーっと観察したりする姿も見られた。「今日は〇〇を見つけたから明日は〇〇」というように、翌日も探してみようという子どもたちの意欲にもつながっていった。その中で、

「先生ここについてない物見つけたよ」

と言う子どもたちもいた。

きっかけ②

保育者・・・白い大きな紙を準備し自由に見つけた物の絵を子どもたちに描いてもらうようにした。
絵の横に自然物の名前を保育者が書き、書ける子どもには自分で書いてもらった。

子どもたち・・・最初は描くことをためらっていた。M子・Y子が進んで描き始めたことで、周囲の子どもたちも、「私これ描く」「同じだけど色が違うから」と会話も楽しみながら夢中で描いていた。

友達の絵を「これ上手だね!」「すごいね!」と認め合っていた。



「これは何だろう」という子どもたちの疑問から、疑問で終わらせないために、そして、より自然に興味をもち、友達と共感し合えるためにはどうしたらよいかを考えながらかかわった。

教材で自然物のビンゴを見た際に①を思いつき実践した。その後、子どもたちの姿やつぶやきから②も取り入れてみたところ、遊びに広がりが見られただけでなく、周囲の自然をよく観察することにもつながり、自然に対する関心も深まっていったように感じた。子どもたちの姿を見ながら、どのような援助を行い・きっかけを作っていくか、難しさを改めて感じることができた。

今後も季節の変化を子どもたちと楽しみながら、子どもたち同士共感することで新たな発見につながるようにしていきたい。

5 歳児エピソード③ 桜の花を咲かせましょう！

園庭に咲いていた満開の桜の花。その桜の花も 4 月末には散り始め、一面が桜の花びらでいっぱいになった。子どもたちが見つけ目を輝かせながら桜の花びらを集め始めた。

「いっぱい集めてみよう！」その一言で子どもたちは両手いっぱいに花びらを持つ。一人の女の子が「せーので上に投げてみよう！」と提案する。

「いーよ！」「OK！」と友達も賛同し、

「せーの・・・それーーーー！」（花びらがひらひらと舞う）

「わーーーーーーー！きれい」「すごいね！すごいね！」

「もう一回やろう！」「みんなも手伝って」

周囲で見ていた友達も誘い繰り返し楽しんだ。

繰り返しているうちに掛け声が生まれた。

「桜の花を咲かせましょう！！！」

最初はそれぞれの場所で投げていたが、横一列に並べばもっときれいでみんなで見れるということに気づいた子どもたち。

「上に上がればもっと咲かせられるんじゃない？」

次々にアイディアが出てきた。

Y子とM子は「走りながら投げればもっと早く咲かせられるんじゃない？」

と言って門の坂から走って下る途中で掛け声とともに花びらを投げ始めた。

「これじゃだめだ！もっと早く」「前に投げれば桜の花咲かせるところ見ながらできるかも」と咲かせ方にとことんこだわる2人であった。

一度散った桜の花びらが、子どもたちの力で再びキレイに咲くことができた。

発見を喜び合い、遊びにつなげていく。楽しむ中でアイデアが生まれていく・・・

一度散った桜の花びらをもう一度咲かせようという発想が面白いと感じた。

子どもたちから次々に「こうしよう！」というアイデアが出てきたため、保育者は見守ることにした。花びらをただ投げるだけでなくどうすればキレイに見えるか、たくさん咲かせることができるかを考え楽しむ中で、友達の見意見を尊重し、認めるというやりとりが自然に生まれていったことに驚き、子どもたちの心の豊かさが表れている遊びだったと感じた。気付く、実践する、納得するまでやってみる、そして成功の喜びを共感し合うという経験を子どもたちと一緒にたくさんしていきたい。

自然を介した 心を動かす体験



3 歳児

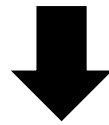
なんだかおかしい
ちょっとおもしろい
やってみたい
楽しいね

4 歳児

楽しそう！仲間に入れて
一緒にやろうよ
不思議だね
一緒にできて楽しいね

5 歳児

何で？ どうして？
〇〇だからじゃない？
今度は〇〇してみよう
〇〇したらどうかな？



好奇心

探究心

考察力

思考力

表現力

思いやりの心

協同性

生きる力

ま と め

- ・研究を進めていくにあたり、保育者間で育てたい子どもの姿や、五感の
とらえと発達の段階のとらえを明確にし共通理解した上で保育に当たると、
保育者は同じ目線で子どもたちの遊びや活動を支えることができ、
改めて保育者間で共通理解することの重要性を再確認できた。
- ・エピソード記録を継続して取ることで、年齢関係なく子どもたちが遊ん
でいる姿から子どもたちの動きやつぶやきひとつひとつに意味があるこ
と、活動の中でどのような心の動き、力が育っているのかが見えてきた。

- ・ 保育者がそれぞれの視点で記録を取っているので、子どもの姿を様々な視点で読み取ることが難しかった。エピソード記録を基に保育者間で話し合いをもつことで自分一人では見逃してしまうようなことに気付き、子どもたちの姿を多面的に読み取ることができるようになってきた。
- ・ 自分たちの言葉かけや援助したこと、環境構成などを具体的に表すことで、それぞれの学年での課題が見えてきた。課題を見える化し、生きる力につながる力を育てていくためにはどのような援助・環境が必要なのか、今後も記録や指導案等を工夫し、定期的に継続し行っていく話し合いの中で探っていきたい。